

主体的・実践的な力を育てる特別活動の指導の工夫

—自分たちの力でよりよい学級づくりを目指す話し合い活動—

大淀町立大淀緑ヶ丘小学校 教諭 小林 一 實

kobayashi kazumi

要 旨

学級や学校の生活の充実と向上を図るという学級活動(1)の目標を達成するためには、子どもたちが互いの考えを尊重しながら見通しをもって話し合いを進めることが必要である。そうした話し合い活動の経験は、学級の中の所属感や連帯感、更には人間関係形成能力を高めていくことにつながると考える。本研究においては、子どもたちの話し合い活動が自発的・自治的なものになるよう、議題の在り方、計画委員会のもち方を中心に研究に取り組んだ。

キーワード：学級活動(1)、議題、計画委員会

1 はじめに

学級活動は、よりよい学級生活の実現を目指して、一人一人の子どもが互いに協力し、学級での生活を充実、向上させるための活動である。とりわけ、学級活動(1)の内容は、自らの生活に直接かかわる事象を扱うことにより、子どもたちが強い関心をもって取り組もうとする活動である。しかもそこで培われる自発的・自治的な活動は、将来子どもたちが社会生活を営む上で必要な力に直接つながるものである。

学級活動の話し合い活動において、大切なことは、自分たちの問題を自分たちで決めることができること、また、自分たちで決めたことを自分たちの力で実現できることである。こういった経験を積み重ねることで、子どもたちは、自発的・自治的な力を身に付けていくものと考え。そのような話し合い活動を展開させるためには、学級の生活にかかわる問題を取り上げ、子どもたちが意欲的に話し合い活動に取り組めるよう、計画委員会を充実させることが重要だと考え、本研究に取り組んだ。

2 研究目的

適切な議題設定や計画委員会の進め方の工夫をすることにより、子どもたちは意欲的に話し合い活動に取り組み、よりよい話し合い活動が展開されるのではないかと仮説を実証研究により検証しようと考えた。

3 研究方法

次のような点に留意して研究を進める。

- 議題設定の在り方
- 計画委員会の進め方の工夫
- 子どもの発言を引き出すための指導の在り方
- 話し合い活動における担任の助言の在り方

前述した研究方法に沿って、以下のような研究内容を設定し、具体的な取組を進めることとした。

(1) 議題設定の在り方について

話し合い活動において、最初にしなければならないのが題材集め、つまり議題の設定である。取り上げる議題によって子どもたちの発言や内容が大きく左右されるため、議題の善し悪しで話し合いの質が決まってしまうと言っても過言ではない。

ア 議題を吸い上げる工夫

議題は、自分たちがやりたいことを何でも話し合っただけでよいというわけではない。まず、学級活動の時間は、学級をみんなの力で楽しく、過ごしやすくしていくための自分たちの時間であることを説明した。そして、話し合う内容は、自分たちにとって必然性のあるものかどうかを、まず、計画委員会で話し合っただけで決めるように支援した。

議題の吸い上げの工夫として、一人一人の思いや願いが出せるように議題箱を作るよう提案した。議題箱に願いを書いた用紙を入れることは、普段なかなか思っていることを言えない子どもたちも安心して自分の思いを提案する機会であると考えたからである。

イ 取り上げる議題について

(ア) すぐに話し合わなければならない議題

議題の中には、今すぐに話し合わなければならない議題もある。『学級目標（内緒話やいじめ、一人ぼっちのないクラス）を忘れないための方法を考えよう』の議題で話し合った時も、議題箱に提案されていたわけではない。A子から「B子とC子がいつも内緒話をしていて、私のことを言っているようですごく気になる。これではせっかく決めた学級目標が全く守られていない。」という相談を受けた。この話を聞く上では、議題として取り上げるにはふさわしくないものと考えた。しかし、多くの子に聞き取りを行った結果、何のために学級目標を決めたのかを再確認する必要があると感じた。そこで後日、A子との話の中で、学級目標を再認識するために、『学級目標を忘れないための方法を考えよう』という議題で、改めてA子が提案することになった。

この話し合いが、後に学級歌（議題『学級の歌を作ろう』）を作るきっかけにもなっていった。このように、一つの議題をきっかけにして、よりよい学級づくりのために、みんなで話し合いたい議題が広がっていった。

また、児童会から提案される議題もある。これは期限が決められており、学校全体にかかわる内容（学校目標や運動会のテーマ等）が多いのでその都度話し合いをしなければならない。しかし提案された議題をそのまま話し合えばいいというわけではない。議題『みどり祭り（各学級が趣向を凝らした出し物で、年に一度、全校が一斉に取り組む児童会集会活動）を盛り上げる計画を立てよう』では、単に自分たちの好きな出し物を決めて自分たちだけが盛り上がればいいというわけではない。大切なのは「何のためのみどり祭りなのか」また、「その祭りを自分たちがどんな祭りにしたいのか」を明確にして取り組まなければならない。計画委員会に担任が入り、最高学年として祭りの趣旨をしっかりと考え、自分たちだけが楽しむのではなく、最上級生として、下級生の立場に立ち、共に楽しむことのできる内容であることや、自分たちの学級のよさを全校に知ってもらうための内容を考えることを確認し合った。取り上げる議題も話し合わなければならないからではなく、クラス全ての子どもたちが自らの問題として捉えるよう担任が支援していくことが必要である。

(イ) 学級集会活動に関する議題について

学級や学校生活を楽しくよりよいものにするためにどんな議題で話し合えばよいのだろうか。

子どもたちから多く出される議題は、スポーツ大会やお楽しみ会などの学級集会活動の議題であろう。

本学級においてもこれまでに2度お楽しみ会を行った。1回目の話し合いでは、とにかく各自やりたいことを発表し、全員でする内容が、サッカー、リレー、ソフトバレーボール、個人の出し物が、クイズ、ダンス、ピアノ発表に決まった。他に進行役やそれぞれの出し物の準備係、タイムキーパーなどの役割も決め、お楽しみ会を行った。しかし、実際にお楽しみ会を行うと、サッカーでは男子だけが盛り上がり、女子にはほとんどボールが回らず、「楽しくない」と言う子が出てきた。また、リレーではチームは決めていたが、順番を決めていなかったため、予定の時間を大きくオーバーしてしまった。他にも出し物毎にいくつも問題点が出てくるなど、最終的に課題が数多く残ったお楽しみ会となった。

2回目のお楽しみ会では、担任が改めて前回のお楽しみ会を振り返らせ、時間内に終えることのできる種目の数やできる内容（みんなが楽しめる出し物）をきちんと整理させた。そして最終的に「みんなが協力して本当に楽しかったと言えるお楽しみ会にしよう」と助言をした。その結果、計画委員の子どもたちは、自分たちの力で次のお楽しみ会は成功させるんだという強い気持ちをもって取組を進めた。

話し合いの中では、みんなが楽しくできるルールを種目ごとに決め、それぞれの種目ごとに担当や責任者を決めるなど1回目のお楽しみ会の反省を生かす話し合いとなり、当日のお楽しみ会は何一つ不満が出ることなく、盛り上がった。

集会活動では、一つのことをみんなが協力して取り組み、成功した時の喜びを共に味わうことで大きな達成感をもつことができる。この話し合いを通して、学級集団が一回り大きくなったと実感できた。自分の役割をきちんと理解し、みんなの役に立っていると感ずること、全員がやり遂げたという喜びを感じること、そして次はもっとよいものをみんなで作りたいと思うことができる学級集会活動の議題は、適切な助言により、子どもたちの力を伸ばす価値ある議題となる。

ウ 担任が配慮しなければならないこと

議題が決まれば話し合う範囲をしっかりと決めておくことが大切である。そのためには計画委員会で話し合いをもち、担任が決めておくこと、子どもたちで話し合うことを明確にしておくことが大切である。

『雨の日の遊びを考えよう』では、学校のきまりにもなっている必要のない物は持って来ないということを前提に、クラスの配当外の体育館の使用など、他の学級や学年にかかわる問題は決めないといった具体的な提示が必要である。

『1年生を招待して楽しい時間を過ごそう』の話し合いの際も、すべてのことを子どもたちに任せるのではなく、事前に担任から日時（1年生の担任と相談して都合のよい日と時間の設定）や場所（雨天を考慮し体育館で行うこと）、危険を伴う道具（1年生に対する配慮）は使用しないことなどを提示することは、子どもたちに見通しをもった話し合いをさせることになり、最終的に、子どもたちが決めたことに担任が口を挟むとといったことがなくなるのである。

(2) 計画委員会の進め方の工夫

話し合いを成功させる大きな要因となるのが、学級活動の前に開く計画委員会の存在であると考えられる。計画委員を適切に指導することが学級会を成功に導く鍵である。計画委員会は基本的に休み時間などを使って、計画委員、担任、提案者等が行うものである。

ア 計画委員会の時間のもち方について

学校の様々な場面で、中心となって活動する6年生にとっては、計画委員会の時間の確保は難しい。まずは担任がしっかりと見通しをもち、計画性をもって計画委員会の時間を確保するよう努めなければならない。私は少ない時間を有効に使うために以下のことに注意しながら計画委員会の時間をもつようにした。

(ア) 事前に計画委員会を開くことを学級全員の子どもに知らせる。

- (イ) 今回はどんな内容で行うのかを事前に伝える。
- (ウ) 計画委員会は、他の子どもたちが見ているところで進めるようにする。
- (エ) 給食の時間に計画委員会の時間を設け、計画委員と担任と一緒に給食を食べるようにする。

イ 『みどり祭りを盛り上げるための計画を立てよう』の具体的な取組から

- ① 提案者を交えてどんなおぼけやしきにしたいのかを確認する。
 - ・自分もお客さんも共に楽しめる内容であること、クラスのよさが伝わるものにする
- ② 目標に向かってみんなが取り組むために、おぼけやしきのテーマを決める。
 - ・『すごくこわくて、おもしろくて、みんなに楽しんでもらえるおぼけやしきにしよう』
- ③ テーマを達成するために気を付けなければいけないことを話し合う。
 - ・6年生としての配慮（低学年への気配り等）

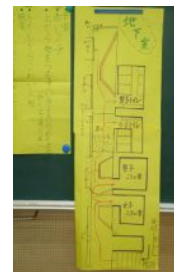


写真①

- ④ 話合いの柱を話し合う。今回はどんなおぼけやしきにしたいのか個々の考えを知るために、おぼけやしき事前アンケートを行う。

- ・おぼけやしき事前アンケートの作成・配布

- ⑤ 集約したアンケートをもとに計画委員が原案を作成（写真①）する。またアンケートには、おぼけやしきの配置図（写真②）を描きたいという子どもがいたので、本人とみんなの了承を得て併せて作成する。



写真②

- ・話合いの柱づくりをする。

- ア みんなに楽しんでもらうために注意しなければならないこと。

- イ どのようなことをするか。（計画委員が話合いの柱を作成し、原案を出す）

- ウ どのような役割が必要か。

- ⑥ 計画委員から学級会で話し合う議題をみんなに知らせ、ホワイトボードに記入（写真③）する。また、学級会カードを配り、自分の意見を書き入れるよう連絡する。



写真③

- ⑦ 最終の計画委員会で話合いの流れを確認し、模擬学級会を行う。

- ⑧ 学級会では、計画委員が作成した原案を元に活発な意見交換が展開された。

学級会終了後、計画委員を集めて反省会を行った。進め方の難しさと過度の緊張があったようだが、最後には「もう一度やってみたい」という言葉が返ってきた。子どもたちからは、自分たちだけで話合いを進めることができたという自信と達成感をもつことができた。

今回の取組から学級会を成功させるためには、何よりも見通しをもった話合いになるよう担任と計画委員が意思統一を図り、綿密な打合せをすることが重要であると感じた。

計画委員会で話合いの柱を決める時、今回のように子どもたちの意見がたくさん出ると予想される場合は、計画委員で大まかな原案提示をするのも時間短縮のため有効であった。また、簡単に決めることができる内容は朝の会や帰りの会の時間を使うようにした事もよかった。

最後の担任の話では、計画委員がこれまでにながらってきたこと、当日の頑張りをみんなの前で具体的に褒めることが大切である。そのことでさらに仕事をやり遂げたという充実感・達成感が大きな自信となり次へのステップにつながっていったと考える。

- (3) 子どもの発言を引き出すための支援の在り方

ア 話合い活動を始めた頃は、積極的に発言する子どもは限られていて、自分の意見をもてない子どもや、意見をもっている相手にもうまく伝えることができない子どもも多く見られた。そこで、少しでも発表

する力を付けさせようと、朝の会での1分間スピーチを取り入れた。その結果、当初発言の少なかった話し合い活動において、自分の意見を発表する子が増えてきた。また、絶えず『教室は間違るところだ』と言葉がけをすることも、誰でも自由に話せる雰囲気づくりにつながったと考える。

イ 担任から子どもへの言葉がけ

言葉がけで大切なことは、よい意見があった時は具体的に褒めることである。また、個々の性格を把握し、その子どもにあった言葉がけをすることである。そのためには、話し合い活動の時間に限らず、各教科や学校生活の様子をしっかりと把握しておく必要があると考える。

A子は明るい性格で、周囲を明るくする学級のムードメーカー的存在であり、話し合いにはいつも積極的に参加する。しかし、話の流れに沿わない思いつきの発言をしたり、集中して最後まで参加することができなかつたりすることもあった。そこでよい意見を言ったときは、褒めることにより自信をもたせ、よくない態度をとったときは、友達の意見を大切にしながら話し合いに参加するよう言葉がけを続けた。その結果、周りの意見も考えながら、発言できるようになってきた。

B子とC子は人前での発言が苦手で、自分から進んで挙手することはほとんどなかった。当てられても自分の意見に自信がないため、そのまま黙りこんでしまったり、時には涙を浮かべたりすることさえあった。しかし、2学期に入り運動会や委員会での仕事、また係活動をやり遂げる中で、そのがんばりを担任や友達に認められたことをきっかけに、自信をもって活動するようになってきた。

ウ ワークシートの充実

自分の意見を積極的に発言できなかつたり、意見をまとめることができなかつたりする子どもたちのために、事前に自分の考えを記入できる学級会カード(写真④)を作成した。それでもなかなか発表できない子どもには、担任が事前に学級会カードをチェックして、コメントを添えることを続けた。

その結果、担任に認めてもらったという自信から挙手や発言が増えてきた。



写真④

(4) 話し合い活動における担任の助言の在り方

ア 筋道から離れた時の助言

学級会は子どもたちの時間であり、本来は担任が口を出すことなく進めることが大切である。しかし場合によっては担任からの助言も必要である。方向性がずれてしまった時や計画委員が会を進められずにいる時には、これまでの進め方を整理し、計画委員やフロアーの人に相談するように提案することも必要である。何のための話し合いなのか、もう一度提案理由にもどって考えさせることが大切である。

しかし、気付いたこと全てに口を出せばよいわけではない。内容に関することや決定にかかわることには原則として口を挟んではならない。「結局担任が決めてしまうんだ」と子どもたちに誤解されてしまう恐れがあり、学級会への意欲が失われてしまう。そのためにも子どもたちだけで決めてはいけないことは、議題として取り上げる前に、しっかり決めておく必要がある。

また、担任からの助言のタイミングも大切である。『学級目標を忘れないための方法を考えよう』という議題で話し合った際、一度全体で決まった内容に対して、後から「やっぱりやめた方がいい」、「僕はさっきの決定に納得していない」と発言する子どもが出て学級会が進まなくなってしまう経験がある。決定は絶対であるという基本的なルールの徹底ができていなかったこともあるが、適切なタイミングで担任からの助言があれば、こんなことにはならなかったと思う。助言が遅すぎると後に修正が効かなることを痛感させられた学級会であった。逆に、出るタイミングが早すぎるとせっかくの子どもたちのための時間が、結局担任が何でも決めてしまうのかという結果となる。担任が出るべきタイミングの見極めはとても難しいが、大切である。

イ 最後の担任からの助言の在り方

学級会全体を通して、よい意見を発言してくれた子どもに対して具体的に褒めることはとても大切である。本人の自信にもなるし次への意欲にもつながっていく。また全体場で褒めることは聞いている子どもたちへのよい例にもなり、全体のレベルアップにもつながるのである。

また計画委員のこれまでのがんばりを改めて全体場で紹介することも必要である。学級会当日のがんばりや準備の段階で取り組んできたことを紹介し、その結果、学級会が円滑に行われたのだということを知ってもらうのである。そのことで改めて計画委員会の重要性が分かるし、何よりも学級会の成功は計画委員会のもち方なのだとすることが理解できるのである。

4 研究結果と考察

本研究の結果から、優れた議題とは子どもたちにとって身近であり、切実感があり、決めたことが実現できるものがあることが必要であるということが明らかになった。また、議題はそのまま取り上げるのではなく、学級の実態や提案理由を担当がしっかり聞いて、子どもたちの力で解決できるのか、また決めたことが実現できるのか、最終的に計画委員と相談しながら、みんなにとって価値ある議題にすることが大切である。また、計画委員会の在り方として、話合いの見通しをもちながら、計画的に準備をすることが大切である。様々な意見が出て決定することが困難だと予想される場合は、事前にそれぞれの考えを聞き、計画委員が大まかな原案提示をするのも有効である。事前に担任の綿密な指導の下、計画委員会をもてば、よりよい話合いを展開できることがわかった。この研究を通して、子どもたちが自分たちの力で活発な話合い活動を展開するためには、議題の設定に配慮し、事前に計画委員会をもつことがなにより重要であることを実感した。

5 今後の課題

より充実した学級会を展開するためには、計画委員会の時間は必要不可欠である。しかしすべての学級活動の時間に計画委員会をもつことは時間的に厳しいものがある。今回の研究でいくつかの議題に取り組んだが、最終的に価値ある議題を子どもたちだけで設定するには至らなかった。今後、担任がいなくても子どもたちだけの力で価値ある議題を設定できる力を育てるためには、経験を積ませることと、価値ある議題の要件を担当がマニュアルとして示すなど指導の工夫が必要であると思う。

また、今回の研究で、話合いの中で自らの主張を述べながらも、相手の意見も尊重する。自分にとって学級のみならずみんなにとってもよいといった結論を導き出す、いわゆる折り合いを付ける話合い活動にまで高めるところにまでは至らなかった。今後、折り合いを付ける力を身に付けさせるためには、どんな手立てがあるのかを追究していきたい。

また、話合い活動は低学年から系統性をもって指導に取り組み、子どもたちに話合いのスキルを身に付けていくことも必要である。そのためには、学校全体で学級活動の意義を理解し、系統的に取り組むことが必要であると考えられる。

参考文献

- | | | | | |
|-----|------------------------|-----------|---------|------|
| (1) | 「新特別活動・文化と自治の力を育てるために」 | 白井 慎 他 | 学友社 | 2005 |
| (2) | 「新しい特別活動指導論」 | 高旗正人・倉田侃司 | ミネルヴァ書房 | 2004 |
| (3) | 「21世紀型特別活動の実践構想」 | 宮川八岐 | 明治図書 | 2001 |
| (4) | 「特別活動の創造的実践」 | 末政公德 | 学術図書 | 2000 |

